

別記様式(第5条関係)

会 議 録

|                 |  |  |
|-----------------|--|--|
| 会 議 の 名 称       | 令和7年度第3回福津市総合教育会議  |  |
| 開 催 日 時         | 令和8年2月5日(木)  | 午後 3時00分から<br>午後 3時46分まで   |
| 開 催 場 所         | 福津市立図書館 2階研修室1   |  |
| 委 員 名           | (1) 出席委員 福井市長、薄教育長、田中教育委員、<br>農崎教育委員、村井教育委員、<br>森教育委員<br>(2) 欠席委員 なし                                       |  |
| 所 管 課 職 員 職 氏 名 | 本多副市長、谷口総務部長、吉崎人事秘書課長、宮原教育部長、原尻教育部理事兼主幹指導主事、志賀新設小学校準備室長、石井学校教育課長、佐々木教育総務課長、芹野郷育推進課長、内兼久総務企画係長、古沢主事、業務受託事業者 |  |
| 会 議             | 議 題<br>(内 容)   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1 開会</li> <li>・ 2 市長あいさつ</li> <li>・ 3 協議 福津市教育大綱案について</li> <li>・ 4 その他</li> <li>・ 5 閉会</li> </ul> |
|                 | 公開・非公開の別   | <input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開  |
|                 | 非公開の理由   |  |
|                 | 傍聴者の数  | 1名   |
|                 | 資料の名称  |  |
| 会 議 録 の 作 成 方 針 | <input type="checkbox"/> 録音テープを使用した全文記録  |  |
|                 | <input checked="" type="checkbox"/> 録音テープを使用した要点記録   |  |
|                 | <input type="checkbox"/> 要点記録  |  |

|   |  |
|---|--|
| 会議録署名委員   |  |
| その他の必要事項  |  |
| 審議内容（発言者、発言内容、審議経過、結論等）   |  |
| <p>佐々木課長：ただ今より令和7年度第3回福津市総合教育会議を開会する。<br/> 本日の会議には、1名の方から傍聴の申出があつている。<br/> 福津市総合教育会議設置要綱第7条の規定により、会議は原則として公開となっているため、ただ今から、傍聴人を入室させる。<br/> （傍聴人入室）<br/> 総合教育会議の開催に先立ち、案内する。<br/> 会場での傍聴については、福津市教育委員会会議傍聴人規則を準用する。会議の進行の妨げとなるような行為については控えるようお願いする。<br/> また、携帯電話、パーソナルコンピューター等電子機器の電源は切るようお願いする。会議の様子の録画、録音、撮影も断る。守っていただけない場合は退出をお願いすることもあるので、ご了承ください。<br/> なお、今回の会議の議事録は、福津市総合教育会議設置要綱第9条の規定に基づき、事務局にて要点記録の方法で作成し、公表は、福津市公式ホームページにおいて行うものとする。</p> <p>1 開会<br/> 佐々木課長：それでは、ただ今より令和7年度第3回福津市総合教育会議を開会する。<br/> 本日の会議は、お手元に配布の会議次第に沿って進める。</p> <p>2 市長あいさつ<br/> 佐々木課長：はじめに、福井市長よりあいさつをお願いする。<br/> 福井市長：令和7年度、第3回目の総合教育会議である。<br/> この会議は、平成27年4月1日から施行された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」に基づき設置された会議であり、私と教育長及び教育委員の皆様との貴重な協議及び調整の場という位置付けになっている。<br/> 本日は「福津市教育大綱案について」を議題として、新しい福津市教育大綱の策定に向けて協議したいと考えているため、どうぞよろしくお願いする。</p> |  |

### 3 協議 福津市教育大綱案について

佐々木課長：本日の日程は、会議次第のとおり、「福津市教育大綱案について」をテーマに、市長と教育委員会の皆様に協議していただきたいと考えている。

会議の所用時間は、2時間以内を予定している。

また、会議の参加者は、次第及び席次表の通り。

これから先は、市長の進行により協議をお願いします。

福井市長：それでは早速、協議に入る。

先ほども述べたように、本日は「福津市教育大綱案について」を議題として、教育長及び教育委員の皆様と協議したいと考える。

現行の福津市教育大綱については、令和7年度第2回福津市総合教育会議において、実施期間の延長について承認をもらい、平成30年度から令和7年度までを対象期間としている。

そこで、令和8年3月末までに令和8年度からスタートする新たな福津市教育大綱の策定をする必要がある。

全国的に少子化が進行する中、福津市ではこれまでのまちづくりの成果もあり、多くの子どもたちが暮らし、学んでいる。

福津の未来を担う子どもたちの成長を第一に考え、私は、「次世代の人材育成」を福津市のまちづくり指針に掲げている。

子どもたちには、未来のまちの担い手、創り手にゆくゆくはなって欲しいと考えている。

福津市では、コミュニティ・スクールに早くから取り組んでおり、学校と地域が一体となって特色のある学校づくりを行ってきた。

そこで、本市における郷づくりの取り組みなどを通じて醸成された地域力を活かして、地域全体で子どもを育て、学び合い、育んでいけるような環境づくりを進めていきたいと考えている。

今回、策定する教育大綱では、大人も子どもも交えて、市民と対話をしながら作り上げていくことを大切にしたいと、福津市の目指す教育の姿を明らかにしたいと考えている。

協議に先立ち、まずは福津市教育大綱策定の進捗状況について、説明をお願いします。

佐々木課長：福津市教育大綱の策定の進捗状況について、説明する。

まず、令和7年度に予算計上している教育総合計画等策定支援業務について、企画提案を募り、最も優れた事業者を選定するプロポーザル方式により事業者を選定し、株式会社ぎょうせい九州支社と策定支援業務に係る契約を締結した。

その後、市民との対話を取り入れた大綱案の策定とするため、令和7年12月20日に学びの場として福岡教育大学副学長・教授である伊藤先生の講演と第1回ワークショップを、令和8年1月31日に第2回ワークショップを行った。また、3月2

0日には第3回ワークショップを行う予定としている。  
それでは、これまでのワークショップの成果を踏まえた「新しい教育大綱の策定について」、原尻教育部理事兼主幹指導主事より説明する。

原尻理事：「新しい教育大綱の策定について～ワークショップの成果を踏まえて～」という表題の資料をご覧ください。

表題の下に、先ほど市長があいさつで述べた福津市の目指す教育の姿ということで、新しい教育大綱を策定するにあたっての市長の考えを「これからの福津市の教育がめざす方向性」として示している。

また、教育大綱をどのように策定していくかも示している。  
簡単に説明すると、方向性については、「未来の担い手」としての子どもの育成を図るということ、福津市が人口増加の傾向にあることや、コミュニティが多層的にあることを最大限に生かしていくということ、子どもを育てることにに関して、大人と子どもが共に創る教育のまちづくりということの意図が示されている。

策定方法については、行政がつくる教育大綱ではなく、市民との「対話」を軸としたボトムアップの共創をしていこうということである。

市民が、「行政が作ったもの」として教育大綱を見るのではなく、「自分たちが関わって創ったもの」と実感することを重視している。このような意図で、現在、教育大綱の策定に取り組んでいる。

資料の裏側をご覧ください。

「福津市教育大綱 策定の考え方」ということで、具体的にどのように策定していくか説明する。

市長の考えである「未来を創る子どもを育む」という目的を最上位として教育大綱を策定していく。

この内容についての市民の願いを聞く場として、ワークショップを開き、意見を募っている。

資料下の表にある通り、現在ワークショップを第2回まで終えている。

12月20日の第1回ワークショップでは、中学生、高校生を含む45名が参加し、「『福津の未来の創り手を育む』とは何か」という内容でグループワークを行った。

1月31日の第2回ワークショップでは、中学生、高校生を含む39名が参加し、第1回で出た「『福津の未来の創り手を育む』とは何か」について、それぞれ解決していくためにはどのようなアイデアがあるかということを出し合ってもらったところである。

資料の裏面ページ左側「ワークショップで出された市民の声」の黄色の枠に、実際ワークショップで市民の方々が付箋に書き

出した言葉をまとめている。

出た意見を羅列するだけでは、中々整理できないため、今回、右側にある4つの視点で整理している。

『ふるさと「で」学ぶ』は、環境をどう整えていくかという視点。

『ふるさと「を」学ぶ』は、ふるさと愛、地域愛をどう育てていくかという視点。

『ふるさと「と」学ぶ』は、いかに探究を進めていくかという視点。

『ふるさと「が」学ぶ』は、大人も含め共にどう育っていくかという視点。

出た意見を整理し、スローガンのようなものに変換したものが、赤文字部分で、その下に解説を記載している。

このような意見を、教育大綱を策定するための方針として整理していくと、右側にある『「個別最適な学び」と「多様な居場所」の充実』、『「郷土愛」の醸成と「未来の担い手」の育成』、『「探究的な学び」への変革と「社会参画」』、『「共育」の推進と「学校・家庭・地域」の連携強化』という4つの方針案としてまとめることができるのではないかとということで本日提案している。

この資料を基に、色々な意見をいただければと考えている。

福井市長：ただいま説明があった福津市教育大綱の進捗状況を聞いての「福津市教育大綱案について」、教育長や教育委員の皆様から意見をいただきたい。

また、新しい福津市教育大綱の対象期間については、令和8年度からの4年間を考えているが、この点についても意見があればよろしく願います。

田中委員：ワークショップへ2回出席したが、市議会議員、中学生、事業者など様々な方が参加していて、幅広い参加者が、同じテーブルで教育について語っているところを見て、大変熱気があると感じた。

教育大綱の策定方法で、ワークショップを通して市民の声を聞きながら策定するという方法は、大変素晴らしいと思う。

また、新しい教育大綱の策定についてという資料の中で、それぞれの世代について書いてあるが、市長の思いとして「未来の福津を創り、担う子どもの育成」と大きく示してあり、おそらく子どもに視点を当てていると感じた。

学校教育の面では、大変良いことと思うが、教育というのは、人づくりであると考えており、生涯学習における各世代の教育についての視点が大事ではないかと考える。

『市民の「対話と参画」』、「大人も子どもも共に育つまち」と書いてあるので、教育大綱へおそらくそのような内容も含まれると思うが、各世代の学びの視点も十分に入れて欲しい

と考える。

人づくりが、まちづくりもする。

特に、教育環境を担ったと思うのが、働く世代の方々である。

高齢者などの学ぶ場は、よくあるが、働く世代は、忙しいこともあり学ぶ場が意外と欠落している。

子どもたちが将来を創ることもだが、若い世代もこのまちを創っていくという視点を取り入れてほしいと考える。

また、学んでいるが、個の学びになってしまっていることを危惧している。

自分が思う仲間であったり、ITの答えを参考にしたり、それも大事なことであるが、今回のワークショップのような、色々な世代と共に学ぶことも大事ではないかと考える。

村井委員：教育大綱の方向性として、学び続ける人材の育成ということが、一貫してあり、また、学びは学校だけではなく、学校教育や社会教育などを通して、色んなところで学んでいこうということで、これは前回のワークショップでも出ていた。

福津市では、コミュニティ・スクールや郷づくり、郷育カレッジなど学校教育だけではない部分も様々運営しており、大変良い取り組みであると思っている。

先ほど、市長より「本市における郷づくりの取り組みなどを通じて醸成された地域力を活かして」とあったが、郷づくりにおいては現在、運営面や組織面で厳しい状況にある地域もある。

市内に過大規模校がある反面、小規模の学校もある。郷づくりも組織力が落ち、運営自体を変えなければならない部分もある。

地域力というのは、今までと同じような状態ではいけない部分もあるため、そこに何かしらの手を差し伸べたり、コミュニティ面を少し変えていったりしていかなければならないと考える。

悩んで苦慮し、どうしていいかわからないとなっている地域もあることを知っていただきたい。

学び続ける人材の育成ということで、幼児から大人まで、みんなが学べる場ということを念頭に置きながら、色々な言葉で示していただきたい考えている。

教育大綱の期間について、市長より、令和8年度からの4年間を考えているとあったが、4年間、または5年間が妥当ではないかと考える。

農崎委員：ワークショップを通して、教育大綱を策定するという方法が、大変良いと思う。

ワークショップへ2回出席したが、幅広い年代の方々が、様々な意見を持っており、グループワークで、私だったら何と答えるだろうと悩むような設問に対しても、色々なアイデアを出し、付箋がたくさん埋め尽くされていたのを見て、福津市の

方々はすごいというのを改めて感じた。

ワークショップで出た意見を反映した教育大綱案が今回出ており、読んでいて、福津市民としてそうだな、子育てをしていてそうだなと思うことがたくさんある。

個別最適な学び、多様性という言葉が出ているが、保護者目線としては、複数で教室へ行って学ぶ良さもあると思う。

よく教育委員会定例会でも教育委員から意見を出しており、財政面で厳しいところもあると思うが、中々学校へ足が向かない子どもの居場所として、教育支援センターのひだまりだけでは足りないのではないかと思う。

たくさんの方が新しく福津を選んで引っ越しきて、子どもを育てる中で、いつ不登校になるかわからない子どももたくさんいるので、保護者も安心できるようなまちづくり、みんなが安心できるようなまちづくりを目指すことを教育大綱に入れていただきたい。

すでに方針として入っていると思うが、そのような部分も入れていただき、難しい言葉ではなく、市民の方が教育大綱を読んで、こういうことだな、福津市は、こういうことを考えているのだろうなとわかるようなわかりやすい言葉でお願いしたいと考える。

森委員：まず、この「新しい教育大綱の策定について」の資料を見たときに、教育大綱の策定にあたって、ワークショップの成果を踏まえて、そして市長の思いが示してあり、これを見ただけでも、福津市の社会総がかりの教育力というのがよく見えていると思う。

今の時代、みんなが参加しなければいけないことは、わかっているが、それを共有すること、共有の好循環が難しい。

課題について、専門の方、関わりのある方だけで協議しても、それをみんなで審議できなかつたら次に繋がらない。

教育大綱を作ること自体は、極端に言えば、専門家が作ればそれで終わりであるため、簡単なことかもしれない。

大事なものは、教育大綱を策定するにあたってのプロセスをどうするかということである。

市民と共有する、市民総がかりという意味で、ワークショップを取り入れることは、必須であると思うので、そのような視点をよく踏まえている。

自分たちだけで作るのではなく、みんなで創るというのが見える。

そのようなプロセスを大切にしてほしいと思う。

また、学び続けるということがあったが、これもポイントである。

人材育成として、文部科学省から、教師も、資質能力の向上のため、端的に学び続け、そうすることで生徒と相似形が取れて

良いと言われており、そのためには、目標を共有しなければいけない。

ゴール地点は、今のところ「未来の福津を創り、担う子どもの育成」と表現されている。

教育は、子どもだけではないため、色々な世代の方々が、関わられるようにしなければいけない。

キーワードにすると、この3つになるのではないか。

1つ目は、「共創」。

文部科学省の学習指導要領では、担い手から、創り手となっており、福津市の教育大綱でも、現行は、担い手づくり、今回の案は、創り手と書いてある。

担うのではなく、自分たちで創っていくということである。

学習指導要領の論点整理でのキーワードは探究である。

今までは、答えを具現化し、それを担うということだったが、探究では、答えが、最善化を見つけることである。

福津の答えは、自分たちで創るという、創り手である。

案の中にも、「大人と子どもが共に創る」とあり、これを、共という字と、創造の創という「共創」というキーワードにできる。

2つ目は、「共育」。

子どもも大人も地域もみんなで創るということで、もう1つのポイントは、共育。

3つ目は、「郷生」。

未来の福津、ふるさとというワードが出てきており、ふるさとと生きるという「郷生」。

この3つが、目標として挙がってくるのではないかと思う。

教育は、子どもだけではなく、「共創」、「共育」、「郷生」ということが、この案の中に含まれていると思う。

それを市民と共有しなければ意味がないため、キーワードでわかりやすく示すといいのではないかと考える。

資料の「市長の哲学」について、福津の歴史を見ると、「対話と参画」であるのだが、対話のイメージは、思考のキャッチボールであり、熟議は、対話より一步深い話であると思っている。

そのままの言葉でも良いが、熟議という言葉、「熟議と共働」の方がより合致するのではないか。

熟議は、集団の集まりで、熟議するぐらい対話することであり、福津は、これまでずっとそれをやってきている。

第1回ワークショップへ出席したが、色々な方々が集まり、グループワークで熟議している。

熟議という言葉の方が、市長の哲学に合うのではないかと思った。

また、参画は、当たり前、前提条件であり、さらに共働、みんな

なが生きるということで、キーワードとしては、「熟議と共働」の場と位置づけ、取り組むことが、これまでの積み上げとしては良いのではないかと感じた。

これは、意見なので、参考にさせていただければと思う。

また、その持っていく方として、4つの視点があり、「ふるさと」に思いが込められている。

この4つの視点という考え方は、大変良く、好みであるが、それを市民と共有しなければならない。

この表現で伝わるかということは、大事なことなので、必ずその後ろに、「ふるさとで学ぶ」というのは、環境的なふるさとの取り上げ方ということで「環境」と示すなどとすると理解しやすいのではないかと思います。

学習内容そのものである「ふるさとを学ぶ」。

ふるさとと共働して学ぶ、探究ということで「ふるさとと学ぶ」。

ふるさとと共に学ぶという共育ということで、「ふるさとが学ぶ」。

このような考え方は大変良いと思うので、それを市民と共有できるように、言葉を添えるなどすると大変良いものになるのではないかと感じている。

教育大綱の期間については、教育基本法に基づき策定された国の教育振興基本計画が、現在、第4期で、学習指導要領が令和10年頃に出る予定ということ踏まえ、4年間とすると令和11年までになるので、教育大綱は4年間とするのが妥当ではないかと思います。

薄教育長：コミュニティ・スクールが始動したとき、私も教育総務課長として取り組んできた。このコミュニティ・スクールが、今の福津市を支えているのではないかと感じている。

そういった中で、今回のワークショップで出た市民の皆様の言葉は、大変ありがたいと考えている。

それと同時に、これをどのような形で継続していくかということが、求められることではないかと考えている。

先ほども出た「子どもの教育」の下支えとなる「大人の教育」、大人の学び、特に保護者の学びをどのように行っていくかが、子どもたちの生活に大きく影響してきているのではないかと。

保護者の方がどうすることで学ぶことができるかということが、子どもたちに反映していくのではないかと。

大人の学びの継続をどうしていくか。

このようなことを教育大綱の中で進めていくことが、大切になっていくのではないかと考えている。

福井市長：私自身、この教育大綱で、大きくはまず次世代のというところを掲げている。

どのような学びを考えていくかももちろんあるが、これまで積み上げてきた歴史文化、住民の方々の思いを引き継ぐということも大事であると思っている。

未来軸においてはいるが、全て過去、現在と繋がっており、その延長であると考えている。

そういった中で、ワークショップに参加した方々からのこれからの教育に関していただいた意見を反映している。

また、「大人も子どもも共に育つまち」と書いているが、ワークショップの中で、大人が学ぶことで、子どもが学ぶという意見もあった。

委員の皆様からいただいた意見にもあった誰をとということに関して、今後また考えていきたいと考えている。

また、教育大綱自体が、考え方や目標を示すものであるため、具体的にどこまで示すかということはあるが、今回、案として出している中で、言葉の定義や、熟議、共働など、市民に伝わるかというような意見についても受け止めていきたいと考えている。

本日、市民共働会議が行われており、教育と共働での福津市の郷づくりや、コミュニティの活動は、一緒に重なってくるものと考えている。

そのような課題も、今後、一緒に掛け合わさってやっていくことも必要である。

それは、学校、地域と区別せず、融合していくものだろうと考えている。

森委員：策定方法へのこだわりの中に、対話による自分事化とある。

自分事化することは、とても大事である。

これまでの流れとして、他人事ではないが、協力はするというレベルまでは行くが、当事者意識までは中々厳しい。

福津市は、そうならないように、対話をもっと求め、熟議を、熟議するぐらい対話するぞとプライドを持って、継続していき、この言葉は福津しか使えない、福津が使うという思いで進めていく。当事者意識だからこそ、熟議するということを先ほど、意見として述べた。

コミュニティ・スクールも、学校、家庭、地域の3つの土俵で、熟議するくらい議論するぞということでスタートした。

それにもよく慣れているので、こだわる必要はないか。

福津の自然や地域の財産のすごさを知っているからこそ、そういうものを共有するので、共に創る「共創」というのが、市長が考える未来を創るというのと一緒に、共に創るんだということで、みんなと共有できるのではないかと思う。

そう簡単なことではないが、約10年、福津はこれを繰り返して取り組んでいるので、今までは広げる段階であったが、これか

らは発展させていく。

他市から続々と転入してきて、住民も大きく変動してきている。その方と熟議すると、良いリソースも、もらえるためチャンスと思う。

薄教育長：どのようにして市民の方に、この教育大綱をわかってもらうかが、とても大事だと考える。

森委員：熟議という言葉は、平成17年までは存在せず、コミュニティ・スクールを立ち上げたときに最初は造語として作られた言葉である。

それが現在、社会的に定着し、辞典に載っている。

熟議は、対話と比べ、方法としては同じ系統だが、狙いが違う。

福津は、その熟議をしているので、その浸透を徹底したらいいのではないかと思う。

他のまちから来た方もいて、そういう方々へも伝授していかないと広がらないので、良いタイミングと思う。

また、この4つの視点を基にし、次は、教育総合計画を教育大綱に落とし込んでいく。

「ふるさとで学ぶ」、「ふるさとを学ぶ」、「ふるさとと学ぶ」、「ふるさとが学ぶ」という4つの眼鏡が設けてあるので、次は各担当者が、その4つの視点で、各行政施策の内容を整理する良い手段になっている。

また、出来たかどうかという評価について、今のところ、未来を創る子どもというのが1つあるが、階段のような達成目標を具体的にしておかないと評価ができないので、そこはこれから具体化するということで確認できたらいいと思う。

田中委員：ふるさとも大事だが、子どもたちが、ふるさとから離れたたり、世界において自由に羽ばたいたりという視点も、大事だと思う。

福津で育ったから、このような人材ができたという評価は、素晴らしい。

福津のために何かしたからではなく、コミュニティ・スクールなど色々な取り組みをしている福津の教育環境の中で、このような素晴らしい子どもたちが生まれてきた、多種多様な子どもたちが育っている、生涯学習も含めて、そのような福津市の教育は、素晴らしいという視点も大事ではないかと思う。

素晴らしい子どもというのは、業績などではなく、小さなことでも、ボランティアでもいい。

閉じ込めるのではなく、羽ばたいていった子どもたちが、愛着を持っているふるさとに還元していく。

そして還元ができるように、行政として、人、物、事を繋ぐ組織と人材がいないとできないと思う。

繋ぐための、人でいったらコーディネーター、組織で言った

ら、連携するための組織を福津市独自で持つ必要があるのではないかと思っている。

良い取り組みをたくさんしているので、それが縦で繋がっていくこともこの教育大綱の中に入れていただければと思う。

1月に行われたコミュニティ・フェスタのときに、世界で活躍するような子どもが紹介されていて、また、公募のけんだまの子や、1年生だけで縄跳びをしていたりした。

公募の子どもたちと、世界に羽ばたいていく子どもたちが、同じテーブルの中で発表していることに感心した。

他の市町村に無い良さであり、どんどんアピールして、繋いでいくことができたらと思う。

福津市の教育や風土、コミュニティ・スクールも醸成されて、コミュニティ・スクールのおかげでコーディネーターなど学校以外の人材も、よく育っている。これは他の市町村にはあまり例がない。

そういった部分を大切にしながら、子どもたちの将来を、羽ばたかせる、自由にさせられるような考え方の中で、ふるさとの視点があるといいか考える。

森委員：共創・共育・郷生がポイントであると思う。

市長が、未来の福津を創りと書いており、福津を創るということなので、そのプロセスの中で、福津はこんなに素晴らしいということを実感しない限り、グローバルな人材は育たない。

世界で輝いていくなどとよく謳われているが、原点は、ふるさとである。

私も、コミュニティ・フェスタを見にいったとき、1人1人に賞を渡しており感動した。これをしていないまちもある。

中体連や団体などでの賞はあるが、市で行い、賞を渡すことは一生忘れない。

ここで言うと、まさしく「郷生」である。

国際的に生きなければいけないので、グローバルな人材は、大事だが、グローバル化と書いても共有できない。

今のような文言で、その目標を創っていくと良いのではないかと思う。

福井市長：ふるさとは、もちろん土台として取り組んでいき、また、日本でも、世界でも活躍する人材が、このようなまちで生まれ、ふるさとが常に育まれている状況で、まちとして、教育が育っていくという環境を創っていきたいと考えている。

他に意見はないか。

(委員からの意見なし)

福井市長：皆様からいただいた提案や意見を参考にさせていただく。

なお、今後の予定であるが、2月19日に教育懇話会で意見を伺い、その後3月に総合教育会議を行い、福津市教育大綱について最終調整を行い、令和8年3月末までに福津市教育大綱の策

定が終了するよう進めていきたいと考えている。

4 その他

佐々木課長：その他の項目として何かあるか。  
(特に発言なし)

5 閉会

佐々木課長：以上で令和7年度第3回総合教育会議を終了する。